

## 三手先斗栱の変遷

建造物研究室

三手先斗栱は寺院建築において塔・金堂・二重門・楼門などの主要建築に使われる。これらの建物は外観意匠上、軒を深めることによって均整をはかる必要があり、軒の垂木を受ける丸桁を前方に送り出すためには、三手先斗栱がもっとも有効的な組物になる。ところで、三手先斗栱は構成部材としては、大斗上に二段に組まれて前方に突出する一手・二手目の斗栱と、三手目を支える尾垂木があるが、両者を重ねる支持法が二手目の秤肘木と力肘木の入れ方によって変化してゆく。そしてまた、尾垂木尻の小屋組内の処理法にも変化が認められる。

7世紀の三手先斗栱としては法隆寺玉虫厨子の雲形斗栱が注目される。これは工芸品のため斗栱の実際の組み方や、力肘木・尾垂木の処理の仕方は必ずしも判然としない。とくに、軒の荷重を均等に受けるように放射状に配された雲形斗栱のおさまりは推定するしかない。しかし法隆寺金堂・塔・中門の上層の組物のような天秤式の積み上げを参考にすれば、十分組立てが可能である。玉虫厨子の三手先は、一手・二手目が画然としている。中国河南省博物館蔵の隋代の陶製家形に見える三手先も同様の構成である。法隆寺金堂・塔・中門では一手・二手目が二段にならず雲斗栱として一体化されるが、尾垂木と力肘木の関係は玉虫厨子と共通しており同一系列下におかれよう。玉虫厨子や陶製家形では壁付斗栱が認められず、法隆寺西院の諸建物にそれがあるのは、本来三手先斗栱は天秤式を利用し前方に突出せしめることから始まったものではないかと考えられ、壁付斗栱は玉虫厨子に見られるような通肘木が変化したものと解される。

薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔の三手先斗栱は、二手目の斗と力肘木で尾垂木を支える。これは前代の力肘木のみで尾垂木を支えるのと著しい違いになる。海竜王寺ではさらに力肘木下に斗が入れられ、尾垂木の支持が強固にされている。力肘木の一体化は法隆寺塔の四・五重目ではすでに一本にすることで試みられている。尾垂木の左右の振れを防止するため、下方を固める意識が働いたものであろう。したがって、尾垂木上の斗栱による丸桁の支持も安定する。加えて軒裏一面に小天井を設けたのも、丸桁を固定しようとした表われとみなせよう。尾垂木の振れの防止はその後の唐招提寺金堂以下の三手先に見られる支輪桁の付加によることで、より強固にされる。尾垂木は支輪桁を受けるための二手目の秤肘木にも組まれるようになり、尾垂木中間が支輪桁をおくことで固定され、軒裏がこれを境として蛇腹の支輪と小天井で装飾化されるようになる。一方、本来尾垂木支持のための力肘木は、尾垂木に組合う二手目の秤肘木を固定するようになり、さらに小天井受けとして上方に力肘木がいれられ、斗が付加されて小天井下が斗栱で混み合う結果をもたらしている。それとともに、丸桁支持のために三手目に実肘木が入れられて確立化する。なお、本研究は科学研究費補助金によるものである。

(工藤 圭章)